
受動喫煙と母子の健康被害 —エコチル調査からわかった科学的知見をもとに—

大田 千晴 氏 東北大学医学系研究科発達環境医学分野
エコチル調査宮城ユニットセンター
東北大学病院小児科

日本では育児中の父親の33.1%、母親の5.6%、妊婦の2%が喫煙をしていると報告されています(2020年度「健やか親子21(第2次)」指標及び目標の一覧資料より)。3割を超える妊婦や子どもたちがさらされているこの「受動喫煙」は、母体、胎児の環境に悪影響をおよぼし、出生後の疾患や将来的な生活習慣病などの原因となる可能性があります。

こうした「出生前から小児期にかけての環境」がその後の健康に与える影響を明らかにするため、環境省では、2011年に「子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)」と呼ばれる大規模な調査を開始しました。エコチル調査では全国で10万人の妊婦さんを3年間にわたってリクルートし、以後13年間、生まれたお子さんおよびその保護者について追跡調査してきました。主な調査として、参加者への質問票による環境・生活習慣情報の聞き取り、血液や尿から得られる化学物質などの解析を行っています。全国に15か所の調査拠点があり、宮城県でも東北大学を中心に調査を続けてきました。

これまでのエコチル調査からは、受動喫煙と「妊娠高血圧症候群」「出生体重」「子どもの喘息発症や血圧上昇」との関連など、さまざまな影響が報告されています。また、妊娠を機に禁煙した女性が、出産後に再喫煙してしまう要因の解析なども進んでいます。

今回は、受動喫煙が妊産婦の健康、長期的な子どもの疾患発症(成人期まで含む)にどのように関わるかについて、エコチル調査の結果を中心に皆さんと考えていきたいと思えます。

大田千晴先生ご略歴

【略歴】

大阪府出身

2000年3月：東北大学大学院医学部医学科卒業.

以降, 東北大学病院, 東北厚生年金病院, 北九州市立八幡病院, 気仙沼市立病院, 宮城県立こども病院等にて、一般小児科・小児救急・集中治療に従事。

2008年：ミシガン州立大学呼吸生理学講座 研究員

2010年：東北大学大学院医学系研究科博士課程

2015年：ミュンヘン呼吸器疾患研究所 博士研究員

2022年：東北大学大学院医学系研究科発達環境医学分野 教授(兼任)

【現在の主な活動】

エコチル調査宮城ユニットセンター長として調査・研究・広報・大学院生等指導を行うとともに、小児循環器科医として大学病院での診療に従事している。また、宮城小児保健協会会長として、5歳児健診等小児保健分野の多職種ネットワークの構築に尽力している。

【主な役職】

- 東北大学大学院医学系研究科発達環境医学分野 教授
- 環境遺伝医学総合研究センター長/エコチル調査宮城ユニットセンター長
- 宮城小児保健協会 会長
- 未来型医療創造卓越大学院 副プログラムコーディネーター
- 宮城県災害時小児周産期リエゾン